

「戦争体験記」

押田澄子

戦争が末期に近づいた頃から本土空襲が始まりました。夜間は光がもれないように深々と黒い布をかぶせたので、子供達は暗い電燈の下で勉強をしていました。

空襲警報も頻繁に発令されるようになり、夜中でも家族全員頭巾をかぶり、庭先の小さな防空壕へ9人寄りそって息をひそめていました。幸い直下の爆弾は落とされませんでしたでしたが、家財道具等をリヤカーに積んで農家の知人宅へ運ぶ途中、錦着山の近くだったと思えますが街の方ですごい轟音がしたので驚いてあぜ道のみぞに身を伏せました。後に聞いたのですが、万町と平柳町の境に1発落とされたそうです。

食料品や衣類は配給制になり、食べ盛りの子が多い我が家ではとうてい配給だけの米や麦では足りず、母が着物や帯等を持って近隣の農家へ行き、野菜やいも等と交換してもらいました。

学校へ持っていく弁当には米が少なく麦がおおく、いも入りでした。少数ですが、弁当を持ってこられない子もいたようです。大根

の葉は干して保存し、おかゆやおじやに切りこんで食べました。その外、さつまいものつるや、食べられる野草を探してとってきました。草入りのうどんが配給になったこともあります。

終戦が近づいた頃^{ころ}には、米の代用として砂糖やごろごろした大きなさつまいも（家畜用^{かちく}と思われる味の無いもの。）も配給されました。衣類も不足し、足袋^{たび}や靴下^{くつした}の穴をつくろい、学校へ持って行く雑巾^{ぞうきん}は、小さな布をはぎ合わせてやっと形にする始末でした。

このような辛い^{つら}日を経験した私たちにとって、あの戦争の目的はなんだったんだろうか。多くの若者^{若者}を犠牲^{ぎせい}にし、国内では飢え^うや被爆^{ひばく}に苦しんだ。このような悲惨^{ひさん}な戦争は絶対に避け^さなくては行けないと痛感しております。